

## 2026 年 8 月 22 日(土)台湾・社区大学全国促進会・淡江大学・訪日団への 渡辺の講義

### 三島市水辺再生・親水転換・合意形成と資金戦略

#### 概要

本講義では、三島市の源兵衛川・御殿川・境川清住緑地などにおける、水辺再生を中心に、グラウンドワーク三島が、過去に実践してきた、環境再生、親水事業、住民の合意形成、法制度下での許認可戦略、資金調達、教育・人材育成の具体手法が統合的に解説された。

源兵衛川では 30 年以上にわたり汚れていた川を、市民・NPO・行政・企業のパートナーシップで再生、維持管理の課題（ボランティア高齢化・人手不足）を背景に、新たな協力体制を構築する先進的事例が紹介された。

源兵衛川を中心としたまちづくり・川づくりの「環境デザイン」では、人と生き物の共生と回遊性、浄化システムなどの方針を採用しつつ、日本の河川法に基づく「管理用仮設道路」の設置など、法的に可能な枠内での計画化・事業化が重要とされた。

境川・清住緑地では、従来の河川改修（約 10 億円）を、グラウンドワーク三島の提案により、遊水地化（約 8 億 5000 万円）に変更、用地買収・養魚所の買い戻し・公園整備・県知事への予算要請などを段階的に達成した。

合意形成では、賛成派と反対派の分離対話、具体的な課題提示（トイレ整備、安全対策）により現実的な妥協点へ導いた。

大学教育の観点からは、抽象論を避け、現場観察・行政ヒアリング・住民聞き取りを学生主体で行う「環境再生ワンデイチャレンジ」などの実践的学習を重視し、法制度理解と資金スキーム習得を通じて、社会的責任を果たす人材育成を目指した。

御殿川では「水のテラス」コンセプトのもと、空き家・空き地の戦略的買収と住民組織の立ち上げ、民間投資を核とする 100 億円規模の資金戦略で、回遊動線の再編と街中改造計画を進める構想が共有された。

## 知識ポイント

### 1. パートナーシップと維持管理

- グラウンドワーク三島の原則は、市民・NPO・行政・企業の三者協働。企業研修を通じた若手参画の仕組みを整備し、長期の信頼醸成（30 年以上）で多様な関係者を束ねる。
- 再生後の維持管理では、ボランティアの高齢化と人手不足に対応する新システムと次世代人材の育成が不可欠。

### 2. 源兵衛川の環境デザイン戦略

- 三島市中心部、延長約 1,550m、富士山の湧水が水源の源兵衛川・農業用水路を対象。着手前は、30 年以上にわたり汚れていた。
- 大枠のマスタープランは専門家協議で事前に策定し、住民への初期段階での提示・説明は避ける、提案者側からの押し付けの誤解を回避。
- 基本方針：人が川で親しみ遊べる空間、生物共生（魚・ホタル）、川中・川辺の回遊性（水辺のコリドー）、雑排水浄化（川底砂利敷・石を用いた浄化路兼歩道）など。

### 3. 法制度と許認可の現実解

- 日本の河川法では、川の中に造る構造物は原則禁止。維持管理上の必要性を根拠に「管理用仮設道路」として許可を得る戦略が有効（約 1 年半の調整）。
- 住民要望の先読みと行政内諾後の現実的提案が重要。制度・法律・資金制約内でのオプション提示を徹底。

### 4. 合意形成の手法

- 賛成派・反対派を分けた丁寧な対話が対立の先鋭化を避ける。反対理由（例：トイレ未設置）には具体解決策を提示。

- 中立的ファシリテーションと「具体化責任」（法律・資金・制度を伴う社会的責任）の遂行が不可欠。
- 下流側の川幅拡張でのグラウンド縮小懸念には、水辺の休憩所・体温調整などの便益提示で容認を獲得。

## 5. 境川・清住緑地の治水転換と整備

- 既存の河川改修計画（幅 10m、約 10 億円）を中止し、遊水地化（約 8 億 5000 万円）に変更誘導。堤防新設、貯留機能付与。
- 用地買収総額約 4 億 5000 万円（地権者と交渉）。下流側養魚所を三島市 6000 万円、清水町約 1 億 2000 万円で買い戻し。
- 湧水池造成、ハンノキの植栽、公園整備（三島市約 1 億円、清水町約 1 億 2000 万円）。県知事要請で境川整備予算約 3000 万円を獲得。
- 遊水地内施設は洪水時最高水位を基準に、地盤より低い施設（池・田んぼ・管理用道路）を配置。河川管理者との協議・許可を徹底。
- 維持管理は県土木事務所が愛護会に委託（年間約 63 万円の草刈り等）。施設修繕は管理者が実施。

## 6. 成果と安全・便益

- 中郷温水池の整備では過去の事故・補償（約 1 億円）に基づく強い反対を、上流からの段階的環境改善の可視化と便益提示で約 4 年半かけて転換・説得。
- 整備後は散策者数の大幅増加、富士山の絶景眺望の確保、土地価格 2 割以上上昇、マンション建設など地域活力が向上。

## 7. グラウンドワーク三島の基本プロセス（75 カ所の実績）

- 住民意向の収集・分析・評価から問題点を明確化、処方箋（アクションプラン）作成、専門家の合意取得、10 億～15 億円規模の資金調達と政治的合意、地元への具体提案までの一連の調整仲介機能を担う。

## 8. 教育・人材育成：学生主体の現場学習

- 都留文科大学での 13 年間の奉職・実践。抽象論より具体事例に基づく問題解決型学習を重視。

- 現地観察・個別行動（午前から現場分散、夕方合流）、情報の体系化（歴史・文化・水利・農業・地域文化）、行政ヒアリング（県土木事務所）、町内会聞き取りを学生主体で実施。
- 「環境再生ワンデイチャレンジ」で草刈り等の短期整備に学生が参加し、住民交流を促進。法律・行政の仕組み理解、補助金制度の調査など、計画の「落とし込み」を指導。
- ゼミ卒業生の約 3 割が公務員に就職し、社会の仕組みと資金を扱う職を「人生のフィールド」と認識・位置付ける。

## 9. 御殿川の整備構想と資金戦略

- 都市型河川の中心部整備では住民意向把握と問題の明確化から開始。2026 年内に「御殿川を愛する会」を設立、源兵衛川や桜川を愛する会と連携して「三島街中改造計画実行委員会」を創設。
- 川だけの整備では不十分。空き家・空き地の戦略的買収と連携で「水のテラス」コンセプトを推進し、川から家へ入る新動線を計画。
- 約 10 カ所の買収（約 10 億円）予定。建設会社等と連携して、10～15 億円規模で継続買収。約 1.5km 沿道の所有者は調査済、整備計画図・模型を作成済。
- 資金は行政依存を避け、国内外投資家から総額約 100 億円を調達する方針。英国ノースリッジの約 500 億円・約 4 ヘクタール再開発（市の直接資金なし）を参考事例として紹介。

## 課題

1. グラウンドワーク三島の原則「市民・NPO・行政・企業のパートナーシップ」を他地域へ適用するための設計（役割分担・信頼醸成・企業研修導入）。
2. 河川法・関連制度の事前確認と、管理用仮設道路としての整備可否に関する許認可調整計画の作成。
3. 住民アンケート設計・実施（川内歩道等のニーズ把握、具体課題抽出）と賛成派・反対派を分けた対話セッションの実施計画（議題整理、合意形成シナリオ、記録化）。

4. 現場課題（例：トイレ未設置、安全対策）の解決案提示と、安全対策ガイドライン（視認性確保、侵入防止と開放性の両立、過去事故の教訓反映）の策定。
5. 上流から下流への段階的環境改善の可視化資料（ビフォー・アフター、来訪者数予測、景観価値向上）と整備後の便益評価指標（散策者数、土地価格、景観指標）のモニタリング計画。
6. アクションプラン（処方箋）の作成と専門家合意取得プロセスの設計。法・資金・制度の枠内で具体化する「落とし込み」。
7. 10 億～15 億円規模の資金調達計画（行政・政治的合意形成、助成・予算枠の探索）と、民間投資家向けピッチ資料の整備（目標総額約 100 億円）。
8. 御殿川周辺住民の意向調査と「御殿川を愛する会」設立準備（発起人集め・規約案・広報）、三島街中改造計画実行委員会の設立計画（参加団体、役割分担、ガバナンス、スケジュール）。
9. 川から家へ入る動線案の詳細設計（アクセス、橋、テラス、セキュリティ、避難、バリアフリー）を模型・図面に落とし込み、約 1.5km 沿道の所有者調査結果に基づく用地交渉計画・優先取得リストの作成。
10. 学生向け「法令・行政の仕組み」カリキュラム整備と補助金制度の調査課題設定、「環境再生ワンデイチャレンジ」現場学習の年間スケジュール化。